入選

水をコントロールする

黒部市立清明中学校　二年　渡邊　央亮

僕の家の前は田んぼや畑が広がっている。その田んぼは最近できた富山県の新しい品種である富富富を作っている田んぼだ。毎年春頃になると立山の雪が溶けて、人のような模様が見えてくる。そのような模様が現れたら苗の植えどきということらしい。僕はこのことからお米を作ることに興味を持ち始めた。

小学校五年生のことだった。総合の学習で自分でお米を作ってみようという学習だった。僕はとてもワクワクしていた。本当に一からお米を作った。種から苗に成長させ、そして苗をバケツに移して「バケツ稲」の完成だ。一週間に何回か朝に水をあげる時間があった。そして稲はどんどん育っていき僕のお腹の当たりまで育った。僕はとても達成感とともに嬉しい気持ちになった。

そこまで育ったころに夏休みが始まった。夏休みでは学校に稲は置かず、自宅で自分で管理するというものだった。僕はいつも通りに水をやった。しかし、稲が枯れ始めてしまった。僕は焦った。「水をやっただけなのに」と、僕は実際にお米を育てている祖父になぜ枯れてきてしまっているのか聞いてみた。すると祖父はこう言った。「水をあげすぎていないかい？水をコントロールしないと稲は育たないよ」。と僕は思い当たる節があった。「そういえば僕は育ってほしいと思って水をいつもよりたくさんあげていた、でもそれがかえって稲を枯れさせる原因になっていたんだ…」僕はショックだった。もう元に戻らないのかと。しかし祖父がこう言ってくれた。「一日に決められた水の量を毎日あげつづけたらきっと元に戻るよ」と言ってくれた。僕は希望を持ち始めた。そこから毎日決められた量を与え続けた。しばらくの間そうしていると稲がもとの姿にもどった。いや以前にも増して育っていた。僕はとても嬉しい気持ちになった。そしてとうとう自分が育てたお米を食べる時が来たのだ。僕はワクワクして自分の作ったお米を食べた。とてもふっくらしていて美味しかった。僕は水が与えてくれた恵みなんだなと感じた。やはり人間には水は必要不可欠なんだなと思った。

僕はあることを感じた。確かに水は僕たちに人間にとって恵みを与えてくれている。でも…時に水は津波や豪雨などの自然災害で「悪魔」にもなる。僕たちは確かに水が必要だが、それをたくさん利用しようとして、地球温暖化を進行させているのも事実だ。中には同じ人間なのに水を満足に飲めない人もいる。産業発展や経済発展など発展するために使っている水が使いすぎで地球温暖化を進めているため、かえって自分たちの首を絞めているともいえるだろう。そしてその水をめぐって戦争をしていたのも事実だ。恵みを与えてくれる水をめぐってこうやって人々で殺し合う。僕は「水をコントロールすることの難しさ」を理解することができた。

これから僕たち人間は様々な水をめぐっての課題があるだろう。そしてこれから先、水は無限ではないから更に水をめぐるいろんなことが起きてしまう可能性もある。そしてその争いを止めるためや地球温暖化を止めるために僕たち次の世代が頑張っていかなくてはいけないと考える。

「水をコントロールして、全ての人に平等に水を分け与える」それを実現することを次の世代の僕たちが目指すべきことだと思う。